

「実は印象派の
画家たちって
非常に前衛的です」
——高橋館長



「印象派の絵は
三菱二号館美術館の
空間にぴったり！」
——篠田さん

館長対談
vol.4



ゲスト

篠田節子 さん(作家)

Interview _ Setsuko Shinoda

“アバン・ギャルド”な存在だった印象派の画家たち

直木賞作家で数々のベストセラーを世に送り出している作家の篠田節子さん。若い頃から美術に親しんでいた篠田さんは、画家をテーマにした作品も発表されています。“生意気盛り”だった若い頃の美術嗜好から現在の好み、さらには絵画の役割まで、旧知の仲という高橋館長と終止リラクスムードでお話しいただきました。

撮影:弘瀬秀樹

高橋 篠田さんと僕はかれこれ40年近くのお付き合いですよ。篠田 もうそんなにになりますか？ 確か最初の出会いは八王子セミナーハウスで、わたしはまだ大学1年生でした。全国の大学生が参加できる大学セミナーハウス主催のゼミに入っていた頃にお会いしたと記憶しています。

高橋 僕の恩師が主催するゼミで、篠田さん、絵画の登場人物に扮するタブロー・ヴィヴァンやっていたと聞いています。アングルの《泉》に扮して壺を担いでいたでしょ(笑)。

篠田 いやだ、そんなこと覚えてらっしゃるの？ 英国の美術史家ケネス・クラークの『ザ・ヌード』がテーマのゼミでした。でも、着衣ですよ、着衣。誤解されないように、ここにきちんと書いておかないと(笑)。

高橋 そもそも篠田さんが美術に興味をもたれたきっかけはなんだったんですか？

篠田 もともとそんなに美術が得意というわけではなかったんです。でも中学の頃、授業で油絵具に出会って、なんて素敵な画材なんだろうと思いました。それまでは水彩しか知らないでしょ。水彩は、一度塗ると失敗したら、もうそれで終わり。でも油絵具は何度でも塗り重ねることができ